

## 主イエスを友と呼べる幸せ

(ヨハネ一五・二二―二七)

今や「べつぴんさん」のお姉さん役で人気も益々急上昇の蓮佛美沙子さんだが、一昨日の「朝イチ」の対談で大人になってからのお友達の作り方というお題で視聴者へ質問をしていた。それを聞いた瞬間かつて彼女が友人を見捨てた引きこもりの役をやっていた2年ほど前のドラマを思い出した。その時の演技が印象的で「この人は売れるんじゃないかな」と思ったのだ。そんなこんなで調べてみるとあの尾道三部作の大林彦彦監督が「二十一年に一人の逸材」と大絶賛しているのも解つたし、現在はあの恋ダンスの新垣結衣さんとも交友を深めているというからこの上友達が欲しいというのはどう言うことかと思われた。

閑話休題。今朝の個所において、イエスはご自身についてくる弟子たちを友と呼び、その関係性について語っている。聖書によればイエスは神のもとから下ってきた神のひとり子であり、神そのものである。そのお方が信じる者を友と呼んでくださる。この幸いについて考えたい。

### 一、友となつてくださるイエス

一五節にはイエスが弟子たちの事を友と呼んだことが記されているが、そこには一つの対比がある。それが「しもべと主人」の関係である。しもべは主人に仕えるから、主人の事をそれなりに理解することは可能だ。しかし主人はしもべに仕事を言いつけることはあれ、主人の心の中にあることを打ち明けることは一般的にはない。互いの間には常に超えてはならない一線が引かれている。では「友」はどうだろう。友情と言うのは相互的なものであり、胸襟を開いた交わりはその真骨頂だ。前述の蓮佛さんと新垣さんは「ガキぼん」「蓮ちゃん」と呼び合い、互いになんでも相談し合っているそう。また「友はどんな時にも愛するものだ(箴一七・一七)」という言葉もある。そこでイエスの姿に注目すると、確かに彼は私たちの友なのだ。というのもも彼は「神と罪人」という隔ての壁を乗り越え、私たちのところに下ってきて私たちのただなかに住み、私たちに声をかけて下さった。またイエスは十字架の死によつて自らが語った「人がその友のためにはいのちを捨てる(二三節)」という至上の愛を実現したお方である。つまりイエスは十字架の上で自らが信じる者の友であることを表したお方なのだ。

### 二、イエスとの友情を深めるために

こういうわけでイエスは私たちに声をかけ、友となつて下さり、更に彼が私たちの友であることは彼の教導と十字架の上での贖罪死を見ることによつて確かめられる。このように神は先回りして私たちのために多くの愛を注がれた。これはすばらしいことだ。しかし友情と言うのは一方通行であつてはいけないし、第一そんなものは友情とは言わない。真の友情には相互性がある。では私たちが友であるイエスのために行うべきことは何か。第一に言えるのはイエスの愛に答え、イエスの戒めを實踐することである。具体的に言えば互いに愛し合うことである(二二、一七節)。もう一つはイエスの派遣と任命に答え、人生の中で実を結ぶことである。誤解のないように言っておくが、これは決して功績をによつて主に振り向いてもらおうと言うたぐいのものではない。先に言った通り、私たちがイエスとの友情は常にイエスがイニシアチブをとつておられる。しかしもしここで私たちがそれに答えなければ、その関係を「友情」と呼ぶことは不可能だし、実際そのような一方通行では真の友情なるものは得られるべくもないだろう。しかしもし私たちが素晴らしい友、主イエス・キリストの愛を知り、それを深めていくときに、心の中に「愛そう」という思いが湧き上が

つてくる。それを愛の応答と言ひ、それによつて私たち一人一人とイエスとの友情は深まっていくのだ。

\* \* \*

「べつぴんさん」から五作前の朝ドラ、『花子とアン』は友情を描いた物語だった。劇中では特に村岡花子と歌人、柳原白蓮との友情がクローズアップされたが、村岡女史と友情を結んだのは白蓮だけではない。一九〇四年に来日し、長く教育宣教師としてプール女学校(現・プール学院大学)や教文館で働いたロレッタ・シヨもその一人。二人の出会いには教文館で児童誌の出版に携わったことに始まる。シヨ宣教師は聖書の教えこそ世界の平和に決定的に重要であると信じていたが、西洋諸国との関係を悪化させた日本政府は多くの宣教師を本国に帰国させた。その際シヨ宣教師が村岡女史に手渡したのが後に『赤毛のアン』となる「グリーンゲイブルズのアン」であつた。この思いに花子は応えた。国籍を超えた友の書物を戦時中も守りつつ翻訳に励んだ。そして終戦から七年、ついに『赤毛のアン』は出版されたのだ。友情は互いを思い、愛し、ために生きることによつて深まるもの。イエスとの愛を正しく深めていくのではないか。